

「文恵 今日からだっけ
本当にごめんな
苦勞掛けて」

「いいのよ♥
今までも2人で
乗り越えてきたじゃない」

「だからそんな顔しないで
あなた♥」

小さな町で
小さなカフェを経営する
それが彼の
…二人の夢だった

「それじゃ気を付けて」

「うん♥
いつてくるね♥」

3年前
夫は独立し
遂に二人のカフェを
ここにオープンした
…けど

チュ♥

昨今の外食産業の
不況に例外なく
私たちのカフェも
その煽りを受けた

今まで私たちが
少ない利益の中でも
なんとかやって
これたのは
大家さんのお陰だった

夫の恩人で
店舗の家賃を
ほとんど無償に
してくれていた

でもその大家さんが
亡くなり
ビルを大家さんの孫が
相続すると
家賃を通常の値段に
戻すと告げられた…
到底支払える
金額でもなく…

かといって
ようやく手に入れた
二人のカフェを
手放すことも出来ず

私たちは
新しい大家の出した
…条件…を呑むことにした
「待ってたよ
文恵さん♥」

「ちよつと
…止めなさいっ!!!」



「うん♡すっごく柔らかさ♡
この爆乳を二度揉みしだき
たかっただよね♡」

「ちよっと!!
セクハラよ!!」

最悪だ:
あの先代の大家さんの
身内だから
変なことは無いと
夫が言っていたけど...

まさかこんな
ヤツだったなんて...

「改装費だって
相当掛かってるでしょ?
固定費がかさむと
ローンの返済も
厳しいかもねw
このままじゃ...」

「なっ...卑怯よ...」

「毎日家に来て
身の回りの世話をする...
それが家賃を
そのままにしてくれる
条件だったでしょ」
「フフ...これも立派な
お世話」でしょ♡
それにいいの?
断れば家賃あげちゃうよ?

「旦那さんのカフェ
つぶれちゃう
かもよ?w」

ここまで頑張ってきて
ようやくオープン
できた二人の店:

ここで私が断れば
...全部台無し

「わっわかった...
でもこのこと...
夫には言わないで...」

「おっ♡交渉成立だね♡
じゃあその胸...
自分で出してみてよ♡」

悔しい...
こんな奴の
言いなりになるなんて
でも...今の私には
こうすることしか
...出来ない

「うひょおお♡文恵ママの
特大ミルクタンク♡
今日から僕のモノだ♡」

「文恵ママって...」

「ああいいからっ
じゃあまずはそのおっぱいで
お世話して貰おうかな♡」

「……これであつての?」

「おお♡すっごい乳圧♡

ってもしかして

パイズリしたことないの?w」

「ないわよ……こんな卑猥なこと……」

「え、旦那さん勿体なつw

このおっぱいで

パイズリ仕込んでないとかw」

「だっ……旦那はアナタと違って

真面目だし私を

大切にしてくれてるからよっ!!!」

「フフ…眺みながらの

パイズリもいいね♡

もっとおっぱい全部使って

そうそう♡上手い上手い♡」

人のカラダを

欲望を満たす

道具みたいに…

本当に

「あああ…もう出るよ
文恵ママっ♡
そのまま続けてっ」

サイアクな男

「ふう…最高っ♡

じゃあ次は

“中”も味見させてね♡」

「えっ…一回出したら

終わりなんじゃ…」

「旦那さんと一緒に

しないでよw

ほらベッド行って」

「待って!!お願い!!

避妊はして…」

「もうしょうがないなw
まあでも」

ギシ

「ゴムハメは
オツケーってことね♡」

ちが
あ
あ
あ

ズボ
ン
ズボ
ン

ちよっ…なにこれ…
夫とサイズが

全然違う…

ズボ
ン

ズボ
ン

「文恵ママ♡」

それからのことは
あまり覚えていない…

あの日から毎日ママツの
「お世話」をすることが
私の仕事になった…

「今日から毎日昼間は
僕の部屋に『お世話』
しにくるんだよ?」

「作法も手取り足取り
教えてあげるからね♡」

「えっ?」

「文恵?」

「大丈夫? 顔色悪いよ?」

「うん…大丈夫
…少し考え事
してたただだから」

「上の大家さんのトコ
上手くやれてる?」

「うっうん
…問題ないよ?」

「ホントに?
通い始めてから
元気ないような
気がするけど」

あの日から毎日…
夫には言えないことを
上の階でしている…





あーっ

夫とはしたことの無い
変態的なプレイを
色々仕込まれて...

胸を使って遊ばれて...

でもそれも全部
夫と夫の店の為
私が耐えれば
全部上手くいくこと

二人の夢の為に
必要なことだから...

カラミカラミ

「いらつしやいあれ？
大家さん珍しいですね」

「そんなわい
そろそろ文恵さん
良いですかね？」

今日も...
その時間が来た...

夫の為に
私がこなさなければならぬ...
サイアクな時間...

「ああすみません
ウチの文恵は
ちよっと体調が」

「あなた...大丈夫よ
ホントにちよっと
疲れてるだけだから...」

「それじゃ
...イってくるね？♥」

「ゴメンなさいアナタ...
裏切っているつもりは
ない...けど...」

「そういうわけで...W
文恵さん借りてきますね♥
多分夜には
お返ししますんでWW」

今日もきつと...いつばい
変なことされちゃう...♥

「うん♡似合ってるね♡」

「特製ホルスタインメイド服♡」

「こっ…こんな格好
しなきゃダメなの？」

「勿論♡あとはこの
ミルクタンクからミルクが
飲めれば完璧
なんだけどね♡」

「それって…母乳っ…」

ちゅっ

あん

くっ

しゅ

本当はもっと
拒絶していた
はずなのに…

「じゃあメイドさんらしく
おねだりして見せて？」

お世話…という名目で…
私は夫が真面目に
働いている間…
コイツ好みの
メスに変えられていく

フフ…
出せるように
してあげるからね…
そのうち♡♡

「ふ…文恵の…
人妻ま●こに…

ご主人様の
肉棒突っ込んで…♡
今日もご指導
…お願いします♡」

わあー

いつの間にか…
コイツとの
行為への嫌悪感は
少しだけ
薄れてきてきた…

「フフ…
良く出来ました♡」

「ご褒美あげようね
…文恵ママ♡」

「うっくう
…それ…パイプじゃ…」

「そうだね♡
ご主人様の肉棒は…」

ぐゅるる

あー



圧倒的すぎて♡
何も考えられなく
なっちゃっ♡♡♡

「ほら♡文恵ママ
鳴いてないで
どこが気持ちいいか
言ってごらん?♡」

「ケツ穴ほじりとあ…♡
マ○○パイプ同時責め…♡
気持ちいいですうう♡♡♡」

「いい子いい子
従順になってきたね♡」

「それじゃあいい子の
文恵ママのケツ穴に…」

「ザーメンプレゼント♡
いっぱい受け取るんだよ?♡」

「ふう〜まだまだ出し足りないよ♡
今日は泊まって行きなよ♡
朝まで可愛がってあげるからさ♡」

「流石に…泊りは…
夫にバレちゃう…」

「いう事聞けないと
どうなるかわかつてる?
ここで朝までセックスするのも
旦那さんの為だよ?」

「わ…分かったあ♡
いうこと聞くからあ♡
夫には絶対秘密にして…♡」

「わかつてるって…♡
旦那さんじゃ出来ないこと
いっぱいして帰ろうね♡文恵ママ♡」

「ゴメンなさいあなた…
今は従順なフリを
してるだけだから…♡」

「びる…
ぐちゅ♡

「びゅん♡

「朝には…
元に戻る…から♡♡♡」